

『中の根本の言葉を章とした知慧（根本中論）』

（第二十四章）

もし、これら全てが空であるならば、
起こることは無く、壊れることは無い。
聖なる四つの真実が、
君には無い背理となる。 1

聖なる四諦が無いので、
尽く知ることや捨て去ることや、
修することや実現されることは、
合理となるのではない。 2

それらが有るのではないので、
四果も有るのではない。
果が無ければ、果に住す者も無い。
向かう者達も有るのではない。 3

もし、八種のプトガラである士夫、
それらが無ければ僧伽は無い。
優れた諸諦が無い故に、
聖なる法も有るのではない。 4

法と僧伽が有るのでなければ、
仏陀が如何様に有るとなろうか。
そのように空性を語るならば、
三宝に害を為し、 5

果が有ることと、
非法と法性と、
世間人の名称の
全てに害を為すのである。 6

そこで説く。君は、
空性の必要性と、空性と、
空性の意味を了解していないので、
それ故に、そのように批判するのだ。 7

諸仏が法を示されたことは、
二諦に正しく依拠している。
世間の世俗の諦（真実）と、
聖なる勝義の諦（真実）である。 8

聖なる四諦が無いので、
尽く知られることや捨て去られることや、
修されることや実現されることは、
合理となるのではない。（2・仏）

聖なる四諦が無いので、
尽く知られることや捨て去られることや、
修することや実現されることは、
合理となるのではない。（2・顛）

諸法、僧伽が有るのでなければ、
仏陀が如何様に有るとなろうか。
そのように語るならば、
三宝に害を為すのである。（仏）

空性は、果が有ることと、
非法と法性と、
世間人の名称の
全てに害を為すのである。（仏）

その二諦の、
分類を良く知らぬ者。
彼らは仏法の、
深甚なる真如を全く知らない。 9

世俗名称に依拠しておらず、
聖なる義は示されることができない。
聖なる義を了解しておらず、
涅槃を得るとはならない。 10

空性について見解を間違えば、
知慧の弱い者達は破滅する。
斯くも、間違った蛇の掴み方や、
明呪が間違つて成就されるが如くである。 11

それ故に、弱き者がこの法の、
底を悟り難いのご存知になり、
成道者の御心は、法を教示することより、
良く退いたのである。 12

過失として背理になるものは、
空に当てはまらないので、
君が空性を捨て去らせる、
それは私に当たらない。 13

空性が適うものは、
それにおいて一切が適うとなる。
空性が適わぬものは、
それにおいて一切が適わぬとなる。 14

君は、自らの諸々の過失を、
私に尽く転嫁する。
馬に実際乗りながら、
馬そのものを忘れてしまったかの如く。 15

もし、諸事物が本性より
有ると随見するならば、
そう見るのであれば、諸事物は、
因縁が無いと君は見るのだ。 16

果と因そのものや、
行為者と行為するものと行為対象や、
生と滅や、
果へも害を為す。 17

二諦の、
分類をよく知らぬ者。
彼らは仏法の、
深甚なる真如を全く知らない。(頌)

聖なる義は示されることができない。
聖なる義に依拠しておらず、
涅槃を得るとはならない。(仏)

君が、私に対して空性を、
過失として背理にすることによって、
捨てさせるものは、
それは空に当たらない。(仏)

空性が適うものは、
それにおいて一切が適うとなる。
空性が適わぬものは、
それにおいて一切が適うとならぬ。(仏)

まさしく君は自らの諸々の過失を、
私に尽く転嫁する。
馬に実際乗りながら、
馬そのものを忘れてしまったかの如く。(仏)

依拠し関係して起こる（縁起生である）もの、それは空性であると説かれる。それは依拠して名付けられるもので、まさしくそれが中の道である。 18

何故ならば、縁起生ではない法（現象）は何も有るのではない。それ故に、空ではない法（現象）は何も有るのではない。 19

もし、この全てが空でないならば、起こることは無く、壊れることは無い。聖なる四つの真実ともが、君には無い背理となる。 20

縁起生でなければ、苦があると何処でなろうか。無常や苦を説かれたことは、本性そのものに有るのではない。 21

本性より有るのであれば、何が全く起こるとなろうか。それ故に空性を害するものには、集は有るのではない。 22

苦が本性として有るならば、滅は有るのではない。本性として尽く留まる故に、滅に害を為すのである。 23

道に本性が有るならば、修することは合理とはならない。もし、その道が修されるものであれば、君の本性は有るのではない。 24

ある時、苦と集と、滅が有るのでなければ、道の「苦の断滅」とは、何が得られるだろうと主張するのか。 25

もし、まさしく本性として、遍く知るのでなければ、それは如何様に遍智となろうか。本性は留まるのではないのか？ 26

依拠し関係して起こるのであるものは、それは空性であると説かれる。それは依拠して名付けられるもので、まさしくそれが中の道である。(仏)

縁起生でなければ、苦があると何処でなろうか。無常や苦を説かれたことは、自性より有るのではない。(21・仏)

自性より有るのでなければ、何が全く起こるとなろうか。それ故に空性を害するものには、集は有るのではない。(22・仏)

自性が有る苦に、滅は有るのではない。自性とは尽く留まる故に、滅に害を為すのである。(23・仏)

本性として有る苦に、滅は有るのではない。本性そのものとは尽く留まる故に、滅に害を為すのである。(23・頌)

道は自性が有るならば、修されることは合理にはならない。もし、その道が修されるものであれば、君の事物そのものは有るのではない。(24・仏)

もし、自性として、遍く知るのでなければ、それは如何様に遍智となろうか。事物そのものが留まることを知るのではないのか？
(仏)

その如く、まさしく君の
捨て去られる、実現される、
修される、そして四果も、
遍智の如く適わない。 27

本性を尽く保持することによって、
まさしく本性として、
得たのではないその果を、
如何様に得ることができるとなろうか。 28

果が無ければ果に留まる者は無い。
（果に）向かう者達も有るのではない。
もし、八種のプトガラの上、
それらが無ければ僧伽は無い。 29

聖なる諸諦が無い故に、
聖なる法も有るのではない。
法と僧伽が有るのでなければ、
仏陀が如何様に有るとなろうか。 30

君によって、仏陀は菩提に
依拠していないという背理にもなる。
君によって、菩提は仏陀に
依拠していないという背理にもなる。 31

君の本性によっては、
仏陀ではないものが、
菩薩行を、菩提を得る為に
追求したとしても菩提を得るとはならない。 32

何者も、法と非法を
いつ時も為すとはならず、
欠如しないものに何をするのか。
本性において行為は無い。 33

法と非法が無くとも、
果が君には有るとなる。
法と非法の因によって起こった、
果は君に有るのではない。 34

法と非法の因によって起こった、
果がもし君に有るならば、
法と非法より起こった、
果が何故空ではないのか。 35

自性を尽く保持することによって、
自性として、
得たのではないその果を、
如何様に得ることができるとなろうか。(仏)

君の自性によっては
仏陀ではないものが、
菩薩行を、菩提を得る為に
追求したとしても菩提を得るとはならない。
(仏)

何者も、法と非法を
いつ時も為すとはならず、
欠如しないものに何をするのか。
自性において行為は無い。(仏)

法と非法の因によって起こった、
果は君には有るのではない。
法と非法が無くとも、
果が君には有るとなる。(仏)

根本中論

縁起生の
空性に害を為すことは、
世間人の世俗名称の
全てに害を為すのである。 36

空性に害を為すならば、
行為は何も無くなり、
開始の無い行為となる。
為さずとも為すとなる。 37

本性が有るならば、諸々の衆生は、
生まれておらず、滅しておらず、
永久に留まることになり、
様々な時点と離れたとなる。 38

もし、空が有るのでなければ、
得ていないものを得ることや、
苦しみを終わらせ、業と
煩惱の一切を捨て去ることも無い。 39

縁起生を
見る者が、苦と、
集と、滅と、
道の、それらそのものを見るのである。 40

「聖なる真実を考察する」という、第二十四章である。

※ (仏) は、『根本中論』チョコロ訳 (『ブッダパーリタ』に引用された旧訳) で、パツァブ訳 (新訳) と異なる記述。

(顛) は、パツァブ訳 (新訳) ではあるが、『根本中論』本論と記述が異なる『顛句論』で引用された偈を示す。

DECHEN 訳

世間人の世俗名称の
全てにも害を為すのである。
縁起生である
空性に害を為す。(36・仏)

縁起生の
空性に害を為すことは、
世間人の世俗名称の
全てにも害を為すのである。(36・顛)

行為は何も無くなり、
行為を始めることも無くなる。
空性に害を為すならば、
為さずとも為すとなる。(37・仏)

事物そのものが有るとしても、諸々の衆生は、
様々な時点と離れたことになり、
生まれておらず、滅しておらず、
永久にも留まることになる。(38・仏)